

各位先生皆様

酷暑が続いていますが、お変わりなきことと存じます。

さて、

このところ、私の知見に入った歴史・系図関係の事情を下記にあげますが、既にご承知のなどの方は適宜、関心のところをご笑覧下さい。

①拙著『古代氏族系譜集成』の内容全てが、国会図書館のデジタルベースに掲載されており、ネット閲覧ができるようになっていました。二千頁弱の内容がネットで閲覧できることに驚いています。刊行後、既に 40 年ほど経っており、その後に分かった東博のデジタルベース史料類は記事にないなど、種々補正を要するものもありますが、それなりに良いことなのでしょう。

②山尾隆一編『山尾家譜系伝』という書があり、藤姓小田一族山尾氏の系図が神代の天児屋根命から現代まで掲載されています。これは明治に華族子爵に列した長州藩士山尾庸三家の系図で、本書掲載系図は、中田憲信編著『各家系譜』十三に所収の「山尾家々譜」に基づいているようで、憲信が山尾家の史料類なども踏まえて編纂し同家に提供したものではないかとみられ、神代・古代部分は『各家系譜』所収記事よりは簡略になっている面もあるように思います。これも、国会図書館のデジタルベースで閲覧ができます。

③実は、上記二項目は、「添県主」のネット検索のなかで分かってきたことです。

このところ、マスコミ等で話題となっている橿原考古学研究所の奈良市・富雄丸山古墳の「造出し」出土の三種の銅鏡にも関連してきます。

この古墳・銅鏡については、考古学者においていろいろ誤解がありそうに私には思われますので、その辺などを以下に書きます。

1 同墳の築造年代が四世紀後半（あるいは四世紀末頃）とされているのは、各種出土品から見ても問題がないと思われます。

2 同墳の規模が直径 109M で日本最大級の「円墳」とされることは疑問であり、これは帆立貝式古墳の一種（初期か）ではないかと思われます。

「造出し」とされる場所にある割竹形木棺から、三種の銅鏡などが出土し、祭祀場所とみられること、この「造出し」も三段築造であること、などがその主な理由です。もっとも、『日本考古学事典』には「帆立貝式古墳は円墳に祭祀の場としての造出を付設したものとされている」〔白石氏〕と記載されており、これに当たるものかと思われます。

付近の六道山古墳（全長約百Mで帆立貝式古墳）も前期ないし中期の古墳とみる見方があります（五世紀初頭頃とみるのが多いが、『全国古墳編年集成』では河上邦彦氏が富雄丸山より先行とする）。

3 上記木棺から出た魼龍文鏡・画像鏡や桜井茶臼山古墳（桜井市）の出土品と同範鏡とされる三角縁神獣鏡について、みな海外製品という見方も出ているが、「三枚とも直径二十センチの大型鏡」であり、魼龍文鏡は四、五百年の伝来とも言われますが（まずありえない）、三角縁神獣鏡も含め三種全てが国産鏡とみるのが自然です。

4 被葬者は、当時の朝廷の重臣で神功皇后外征にも随従した中臣烏賊津使主^{いかつおみ}（雷大臣命）とするのが自然かと思われます。このあたり添下郡が、「倭の六御県」の一つに数えられる添県で、富雄丸山古墳の北方近隣・三碓には添御県坐神社の論社も鎮座します。

添県主は中臣支族であり、烏賊津使主が外征により韓地で当該虺龍文鏡の原型を入手した可能性も考えられるところです。被葬者が知られる古墳はきわめて少ないのですが、もし当該古墳の被葬者が烏賊津使主だとすると、神功皇后外征（拙見では西暦 372 年頃と推定）なども含め『書紀』記事の信頼性も高まるものと思われます。中臣氏の墳墓もこれまで知られなかった事情があり、当該墳あたりの諸古墳も、添県主よりもその本宗の中臣氏一族のものと併せて考えられます。

宝賀寿男 25.8.06 記

【注記】

富雄丸山古墳については、筆者の推論も入っています。あえて大胆に推論してみると、表記のような見方もできるかもしれないという、一つの参考試案として提示したものです。